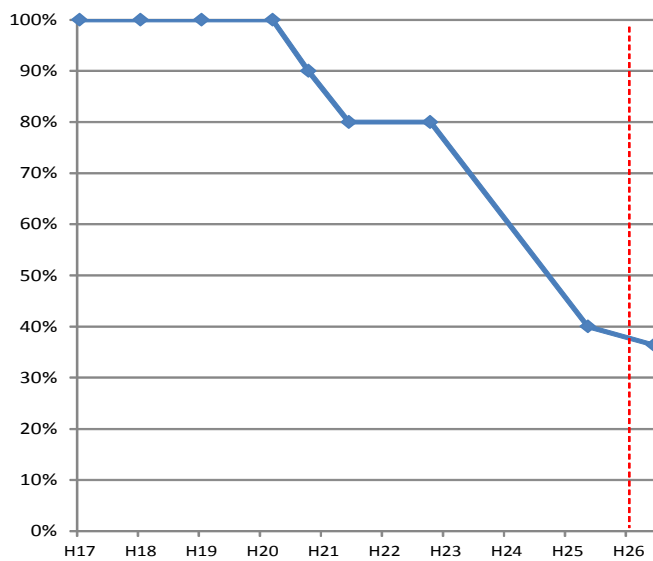


樹種名	カリン		
科 目	バラ科		
学 名	<i>Chaenomeles sinensis</i>		
分 布	原産地は中国東部で、日本への伝来時期は不明である。		
樹木特性	カリンはバラ科の落葉高木であり、適湿地でよく育ち、耐寒性がある。 秋に実を熟成させるが、かたく酸味が強いことから生食はできないが、砂糖漬けや果実酒などに用いられている。		
用 途	床柱、家具材、果樹として利用。		
植栽本数/面積 (植栽密度)	11 本／0.01ha (3,000 本／ha)		
特 徴	【樹 形】 落葉小高木で樹高は 6~10m 程度となる。花期は 3 月から 5 月頃で、5 枚の花弁からなる白やピンク色の花を咲かせる。葉は互生し倒卵形ないし楕円状卵形、長さ 3~8cm、先は尖り基部は円く、縁に細鋸歯がある。 未熟な実は表面に褐色の綿状の毛が密生する。成熟した果実は楕円形をしており黄色で大型、トリテルペン化合物による芳しい香りがする。10 月から 11 月に収穫される。実には果糖、ビタミン C、リンゴ酸、クエン酸、タンニン、アミグダリンなどを含む。カリンの果実に含まれる成分は咳や痰など喉の炎症に効くとされ、のど飴に配合されていることが多い。渋く石細胞が多く堅いため生食には適さず、砂糖漬けや果実酒に加工される。加熱すると渋みは消える。 種子に含まれるアミグダリンが加水分解した成分ベンズアルデヒドが、咳止効果があるとされるが、アミグダリンは加水分解により猛毒のシアン化水素も発生するため、国立健康・栄養研究所などが注意を呼びかけている。		
試験地での様子	 		
被 害	特になし。		

カリン 現存率



【現存率】

植栽後、3 年目頃より枯死が発生しているが、枯死の原因は特定できていない。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 36.4%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

植栽後、3 年程度までの初期成長は遅く、その後生存している樹木は少しずつであるが成長をしている。

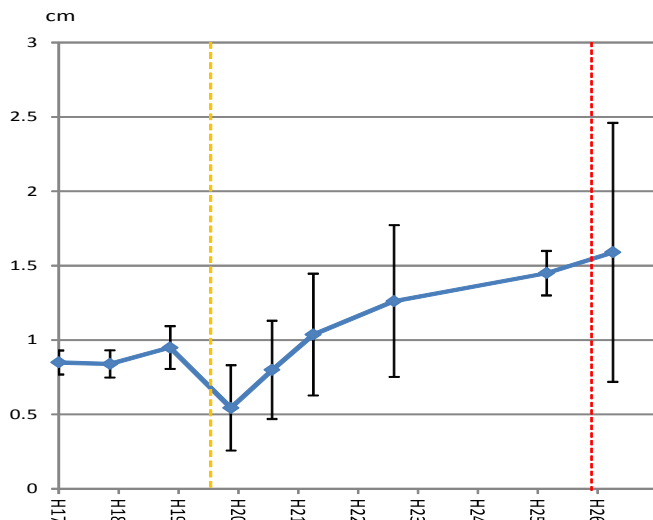
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 1.59 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。



カリン 根元・胸高直径



【樹 高】

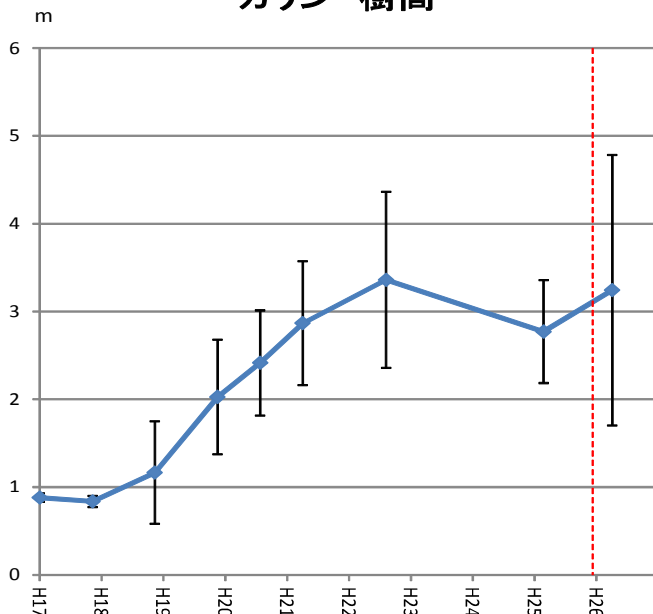
植栽後、3 年程度までの初期成長は遅かったが、その後生存している樹木は少しずつであるが成長をしている。また、H25.6 で数値が低下している理由は、樹高の高い樹木が枯死したものである。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 3.24m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



カリン 樹高



《プチ情報》

果実は生薬名を和木瓜（わもっか）という（但し和木瓜をボケやクサボケとする人もあるし、カリンを木瓜（もっか）とする人もいる。これらカリン、ボケ、クサボケは互いに近縁の植物である）。

なお、日本薬局方外生薬規格においてカリンの果実を木瓜として規定していることから、日本の市場で木瓜として流通しているのは実はカリン（榎植）である。

花・果実とも楽しめ、さらに新緑・紅葉が非常に美しいため家庭果樹として最適である。語呂合わせで「金は貸すが借りない」の縁起を担ぎ庭の表にカリンを植え、裏にカシノキを植えると商売繁盛に良いとも言われる。